



角川小説新書

ぎんの一生

昭和三十年七月十一日 印刷
昭和三十年七月十五日 發行

定價百貳拾圓

著作者 田宮虎彦

發行者 角川源義

印刷者 中内佐光
東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所 株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座 東京一九五二〇八番
電話九段(33)〇二一一(代表)一四

(落丁・亂丁本はお取替へ致します)

Printed in Japan

嚙印刷・鈴木製本

ぎんの一生

田宮虎彦



忠弥

角川小説新書

目次

ぎんの一生

マドロス・パイプ

酒場ルルチモで

女ごころ

白い蝶・紅いダリヤ

煉羊羹

眉月温泉

あとがき

一六	二七	二四〇	二七	九三	六七	四〇	五
----	----	-----	----	----	----	----	---

ぎんの一生

ぎんは自分では明治三十三年子^ね年の生れだといつてゐた。そして、生れは信州松本といつてゐた。だが、そのどちらも、事實かどうか知らない。

明治三十三年生れとすると、數へ年でいつても、五十二、三年といふ歳である。老いたといへば、さうもいへもしようが、猫背に背のまるくかゞんで來たぎんの姿は、もう六十の坂を越えた老婆のやうで、もそもそと呟くやうにものをいつたり、勝手にぎんひとりが仕事してゐる時の物ぐさな姿は、どうみても五十二、三といふ風には見えなかつた。

兼子は、もう二十四、五年、ぎんを使つてゐる。戦争中に死んだ山脇に世話をしてもらふやうになつてから、二、三年たつた頃に、山脇の店のものからの口きゝで雇ひ入れたのだつた。何でも、その青山といふ男の親戚で長い間ぎんを使つてゐたのだが、その家が滿洲へ轉任になつたので、暇が出たといふことであつた。

兼子は、ぎんが来るまで、若い女中や婆やを五、六度かへてゐた。その頃、兼子は西銀座のシルビアと

いふバアに出てゐて、山脇ともそこで知りあつたのだつたが、大森新井宿の、山王ホテルの別館から淋しい坂道を辨天池の方へおりてゆくあたりに一軒家を山脇に買つてもらつてゐて、そこから西銀座に通つてゐた。山脇は最初日曜日の夜だけその家へ來てゐた。勿論、堅實な生活ではないので、若い女中も、年とつた婆やも、そんな兼子の生活を、心の底では軽くさげすんでゐるやうで、雇はれてゐる女としてのへりくだつた従順さがなかつた。ある夜、シルビアに出てゐて、気分がわるくなつたので、九時頃、早退けし、て歸つてくると、座敷で若い男が女中とたはむれてゐたことがあつたりした。洗濯屋の御用きゝで、何時の間にか、女中と出來てゐたのである。

兼子には、そんな女中の不しだらが、そのまゝ自分の生活へのあてつけと思へた。自分に、女中の不品行を責める資格がないと思ふことが二重に兼子の心にはねかへつて來た。勿論、その女中はすぐ暇を出した。そして、六十五といふ老婆を雇ひ入れたが、毎日、夕方から兼子が出て行くと、老婆はそのあとで、勝手の水屋や冷蔵庫の中を漁るのだつた。

その老婆は、もと横濱で、ポルトガル領事館の領事の家につとめたことがあるといつて、はじめは、ポルトガルの娘が、日本人に似てゐることや、領事館の花園がともきれいであつたことなど話してゐたが、二週間たち三週間たちして兼子に馴れて來ると、つとめてゐた領事の家の中のことを、あけすけに話してきかせるやうになつた。

それは、最初には、外國人の女が仕立屋をよんで假縫ひをする時、下着も何もかもすつかり脱いでしま

つて、年よつた婆やの私でもあつと聲をたてておどろくほどだ、といったやうなことを話したのであつたが、だんだんと、きはどい濡れ場の描寫になつて、その自分の描寫に、聞き手の兼子がどんな反應をしめてゐるかを、たのしんでゐるやうに、舌で自分の唇をぬらしぬらし喋りつゞけた。そして、その頃には、兼子が西銀座へ出かけてゐる留守の間に、座敷の隅戸棚に山脇がおいてゐるジョニー・ウォーカーやブラックアンドホワイトといったウイスキーを、少しづつなめてゐるとわかるやうになつた。

それから、兼子は何となくその老婆の前身を知りたくなつて、人を使つて調べさせてみると、ポルトガルの領事館にゐたなどといふのは眞赤な嘘で、あやしげな店の皿洗ひ婆をしてゐたことなどがわかつた。

ぎんの話を手脇がした時、そんなことが幾度も重なつたあとであつたので、兼子は青山にあつて、

「そんなにいゝ女中さんなら、どうして大連までつれてゆかないの」
ときいてみた。すると、青山は、

「それが、その家で、ぎんにいくらさうすゝめても、いやといふんですよ、どうしても内地を離れるのはいや、東京をはなれるのもいやですと、あまりぎんがはつきりいふものですから」

と答へた。それから、その家で、ぎんを手ばなすのは惜しいけれど、それほどまでぎんが満洲に行くのがいやなのなら、ぎんをどこかいゝ家に世話してやりたいといふので自分が奥さんのところを思ひついたのだと言ひたした。

兼子は、青山といふその男が、自分のことを奥さんといった時の、ちよつと、ためらふ言ひ方に氣づい

て、心の中で舌打ちした。そして、それに仕返へしでもしてやりたい氣持もあつて、

「あら」

ととぼけるやうな言ひ方をしてから、

「いゝ家ですつて、それなら私のとこなんか資格がなさうね、私の家なんかより、もつと、ちゃんとしたお邸にでもお世話してあげたらどうなの」

といひかへしてみた。青山は、その兼子の言葉にとげがかくされてゐるのに氣がついて、赤くなつたり青くなつたりしながら、

「とんでもございません」

と返事を兼子にかへした。そして結局、ぎんは兼子のところに雇はれて來たものであつた。

もつとも、ぎんには、兼子のいつたやうな、ちゃんとしたお邸につとめることの出来ないわけがひとつあつた。それは、その時に、青山がいつたのではなく、その後山脇が青山からきいたといつて兼子につたへたのであつたが、ぎんが、自分の生れは信州松本だといふことしか明かさない——といふことに、普通の家ではひつかゝるのであつた。

事實、兼子が、ぎんに松本のことをきかうとすると、ぎんは困つたやうな顔をして、やがて自分で話題をそらすとか、仕事にかこつけて座をはずすとかした。そんなぎんをみてゐると、そのことに觸れられることが、ぎんには堪へられないのだと兼子にはわかつた。そのうち、兼子も重ねてそのことをぎんに聞か

うといふ氣持をすてた。

青山が、ぎんについて、よく働くいゝ女中さんだと言つたことは、事實であつた。兼子はぎんに、幾度も、そんなに一生懸命に働かなくてもいいのよ、といはねばならぬほど、ぎんは骨をしみせずにはたらいだ。かげひなたもなかつた。兼子が、いちいち、どうして、かうして、といひつけなくても、兼子の氣持を見抜いてしまつてゐるやうに、ぎんは、どんな仕事も、自分からした。そして、何をしても、そつがなかつた。勿論、上手とか、氣がきいてゐるといつたふうな、目だつた仕事ぶりとはいへなかつたかもしれないが、あたゝかいまごろのこもつた仕事ぶりであつた。

それは、何も、兼子に對して、特につとめてゐたわけではないやうである。それは、ぎんが兼子のところへ來るまでゐた青山の親戚の家でも、同じやうに、一心につとめてゐたらしいことでもわかる。ぎんが兼子の家に來てからひと月ほどたつた時、大連へうつつていつたといふぎんの前につとめた家の主婦から、兼子あてに手紙が來て、それには、

——ぎんさんには七年お世話になりました。とてもいい人です。身寄りもないお氣の毒な人のやうですが、かげひなたのない、心のきれいな人です故、どうか、よく面倒をみてあげて下さいますやう、私どもからも願ひ致します。

と書いてあつた。

ぎんと、その家とは、その後もずっと手紙のやりとりをしてゐた様子であつた。それはその家の主婦と

だけではなく、女學校に通つてゐるその家の娘ともやりとりしてゐて、兼子は、その家からぎんに送つて來たロシヤ飴をもらつたことも幾度かあつた。ぎんが兼子の家に來てから四、五年目に滿洲事變が起つた時には、ぎんは、驛前に買ひ物に出かけたついでに、號外や夕刊を幾つも買つて來ては、女中部屋でよみふけてゐたものであつた。

ぎんが兼子の家へ來た頃、ぎんは二十五、六に見えた。その時、兼子が、

「ぎんさん、歳はいくつなの」

ときくと、ぎんは、

「二十八です、明治三十三年の子年生れです」

と答へた。今、思ひかへすと、その時、ぎんは、兼子のとひかけに、すぐには答へず、ちよつと、心の中で指ををるやうに、間をおいて答へたやうだ。もつとも、そんなことは、二十五、六年もあとになつた今から思ひかへしてのことであつて、その時は、兼子は、

「まあ、二十八つて、そんなに見えないわ、私、二十五か六と思つてたほどよ」

といった。白いぎんの頬が、ぽつと赤らんだ。それが、兼子には、ぎんの心の素直さのあらはれのやうに思へて、ひどく好感がもてたことを思ひ出すことが出来るのだつた。

ぎんは小柄で、しとやかな日本風な女のやうに思へた。背丈も五尺か、あるひは二、三分五尺に足りな

いかもしれなかつた。肌の色の白い、華奢な感じで、朝夕の炊事や掃除や、そのほかいろんな仕事を、そんな感じの身體で、よく出来ると思はれるほど、ぎんはつとめてした。女中らしいやさしきなど、ぎんには感じられなかつた。今でこそ、老醜じみた汚さが感じられるのだが、あの戦争のすむ頃までは、きれいな、といふより清潔な感じが、いつもぎんをつゝんでゐた。その頃、兼子が年の暮に、ぎんに反物を買つてやらうと思つて、日本橋のデパートへつれていつたことがあつた。これこれぐらゐの値段で買つてあげるつもりだから、自分で好きな柄をえらびなさいといったのだ。もつとも少しぐらゐなら、それより高くても買つてあげると言ひたして、同じ賣場で、兼子も自分の反物をえらんでゐたが、やがてぎんが、——それでは、これを買つていただきます、といつてもつて來た反物をみると、自分のいつた金額よりずっと安い銘仙であつた。

「もつと、いゝものをお買ひよ」

兼子は、それを見て、すぐさういつたが、ぎんは、

「この柄が好きでございますから」

と答へた。白梅の小紋模様であつた。そして、兼子が、いくら、もつといゝのを選びなさいよ、といつてみても、ぎんは、これでよろしうございます、これが好きでございますといつてきかなかつた。

兼子は、そのことを山脇にはなした。すると、山脇は、

「白梅かい、ぎんにうつてつけぢやないか」

といつて笑つた。

さういへば、ぎんは、白梅のやうな、美しいにしても、どこか淋しさのかげの流れた女であつた。農家の背戸のかげに、しづかに咲いてゐる白梅、それも、枝が三、四本に分れただけといつたさして大きな木に咲いた白梅である。

山脇は、笑つてから、

「ぎん、よくみるときれいな顔をしてゐるね、眉がきれいなのかな、眼がきれいなのかな」といつた。

日本風な顔とかいたが、ぎんは、夏になつても、ワンピースなど着たことがなく、いつもきれいに洗つた浴衣に、ちやんと帶をしめてゐた。赤いたすきをきりつとしめてゐる姿は、ことさら清潔に見えた。兼子が、自分の着あきたワンピースなどをやらうとすると、ぎんは、

「私には似合ひません」

といつて辭退した。無理矢理、ぎんにワンピースをきせたことがあつた。ぎんは半分泣きさうな顔をして、その時は兼子のいひなりになつたが、そのワンピースを着ると、私には似合ひませんといつたぎんの言葉どほり、いつものきりりとしたぎんがどこかへ消えてしまつたやうで、妙に、胴や腰のあたりがしまりなく見えた。それに、自分の手をどこにもつていつていゝかわからないやうに、ぎんは變に居心地のわるさうな、もぢもぢした様子をつくつた。

といつて、ぎんの面差が、純粹に日本風といったわけではなかつた。山脇が、——眉がきれいなのかな、眼がきれいなのかな、といったやうに、ぎんの眉は、眞黒な眉であつた。眉墨など金輪際いらぬのである。そして、その眉毛だけをみたら、意志の強い、自分の思つたことはあくまでつらぬき通すといった感じがしさうな眉であつた。だが、その眉の強さは、ぎんと向ひあつてゐると、ちつとも感じられない。二十數年ぎんと一緒にすごした兼子だつて、ぎんのそんな眉毛に氣がついたのは、無理矢理ワンピースを着させてみたその時が、はじめてで、その後も二、三度あるかないかであつた。

ワンピースを着て、ぎんが何時ものぎんでなくなつた時、兼子は、うろたへてでもゐるやうなその顔を見て、おやつと思つてみつめた。片意地さうな、その時のぎんの顔は、兼子には印象的であつた。

ぎんの眉毛がいつも、そんなに強く感じられないのは、ぎんの白い、時にはぱつと桃いろになる、頬のいろのせりであつたし、澄んだ瞳のせりでもあつた。

ぎんの瞳は、いつもきれいに澄んでゐるやうに見えた。ぎんが三十五、六になる頃までは、瞳のまはりの白いところが、青みをおびてゐるやうにさへ見えた。もつとも、ぎんの瞳がうるんでゐるやうに見える時もあつた。兼子は、時々、うるんだぎんの瞳に氣づくことがあつた。兼子は、そんな時、かつて、自分が西銀座の店で、流しにはいつて來た人相見から聞いた言葉を思ひ出した。

それは瞳子どうしのうるんだ眼をしてゐる女人は多情好淫の相であるといふのであつた。シルビアに働いてゐた珠子といつた同輩に、その人相見の言葉にそっくりそのまゝあてはまる女がゐて、同輩のところへ通つ

てくる男まで見さかひなしに奪ひとつてゐたので、兼子ばかりでなく、その時その場にゐあはせた女たちは、同時に、

「まあ」

といつて、眼を見あはせあつたものである。兼子は、そのことを覚えてゐたので、ぎんのそんな瞳を、はじめてみつめた時、おやと、ぎんのかくれた一面をみたやうにおどろいた。

兼子がおどろいたのは、その時、兼子の心にひとつの危惧があつたからである。ほかでもない、山脇がぎんにひかれてゐるのではないかと思はれる節々があつたのだ。

兼子は酒場で山脇と知りあつた。そして、山脇に、新井宿に家を買つてもらつて、世話をうけてゐる。さうした山脇は、道樂者ではないにせよ、女に固いとはいへない。兼子は自分の生き方が、そんな山脇に支へられてゐるのに多少の不安がないでもなかつた。といふより、いつも、脅迫観念のやうに、山脇の心がいつ自分からはなれてゆくのか、その頃の兼子は心配でならなかつたのだ。勿論、その山脇の相手は、酒場の同輩といった自分と同じやうな職業にゐるものと兼子は考へてゐたのだが、まさか、ぎんとは思ひもよらなかつた。

といつて、山脇とぎんとの間がはつきりうたがはしいといふわけではなかつた。たゞ何となく山脇の素振りに、そんな氣配が、その頃みえる時があつたにすぎぬ。それは、たとへば、山脇の来る日が、それまで日曜日の夕方ときまつてゐたのに、日曜でない日、兼子が西銀座に出ていつたあとへ、山脇が来るやう

になつたことなどである。しかし、兼子が山脇の世話になるときまつてしまつてから、生活費は全部、山脇から出てゐた。兼子が店に出ることをつゞけてゐるのは、兼子の勝手であつて、出なくてもよいやうに、山脇は、それだけのことをちやんとしてゐた。山脇が新井宿の兼子のところへ来る日も、何も日曜日だけと、もともと話しあひできめたわけではなく、いつもは兼子が店へ出るので、自然にさういふことになつてしまつただけであつた。

だから、山脇が、日曜日のほか、月曜に來ようが、火曜に來ようが、また金曜に來ようが、兼子の方とやかくいふことは出來はしない。しかし、さうはいふものの、自分がまだ店から歸る前に山脇が來て、ぎんを相手に話しこんだりしてゐると、兼子は、妙な氣持がした。ある夜など、兼子が歸つて來ると、ウイスキーに頬をそめた山脇が、ぎんに脚をもませてゐたこともあつた。また、ぎんが、——これを旦那様にいたゞきました、といつて、白粉や口紅を兼子にみせたこともあつた。

それは、和製にしても、可成り高級な化粧品會社の製品であつた。

「さう、よかつたわね」

兼子は、ぎんには、たゞ、さういつただけであつたが、山脇には、

「ぎんにおしろいなどやらないでよ」

と釘を差すやうにいつた。山脇は、

「いけないかい」